

## 「キャッチ＝22」(上・下2巻)

ジョーゼフ・ヘラー(著)、飛田茂雄(訳)

早川書房 1977年3月15日刊

本書はアメリカ人作家ヘラーが第二次世界大戦中のイタリアのピアノーサ島を基地とするアメリカ空軍に所属していた様々な人々と出来事を時間的前後関係を複雑に入れ替えて描いた戦争小説の傑作である。

「キャッチ＝22」とは実在しない軍規であるが、上官はこの軍規を盾に隊員を前線に送り込む。この軍規は「もし出撃に参加したらそれは気が狂っている証拠だから、出撃に参加する必要はない。ところが、出撃に参加したくないというのなら、これは正気である証拠だから出撃に参加しなくてはならない」というパラドキシカルな構造をもっている。実際、英語圏メディアでは「キャッチ＝22的状况」という表現を用いて、最悪の状況からどうしても逃れられない八方ふさがりの状況を指すことがある。退陣しても続行しても国民からの批判が止みそうもない安部首相はまさにキャッチ＝22的状况にいると言える。

ところで、本書の最大の魅力は、矛盾と皮肉に満ちた文学表現にあると言えよう。例えば、「ある人々は生まれながらにして凡庸である。ある人々は凡庸さを自分で身につける。またある人々は凡庸さをむりやり押しつけられる。メイジャー少佐の場合はこの三つが揃っていた。あらゆる特徴を欠いた人々のうちでも、彼は他のだれよりも特徴のない人間として必然的にめだつ存在となっていたので、彼に会った人々は例外なく、彼がいかに印象的でないかを印象づけられるのであった。」という表現は論理的ではないが、実存する人間の描写としては実に説得力がある。主人公ヨッサリアンの次のような観察はどうだろうか。「どれだけの悪徳商人や家主どもが勝利をおさめているだろう。どれだけの勝利者が実は敗者であり、成功者が失敗者であり、金持ちが貧乏人なのであろうか。どれだけの知ったかぶり屋がまぬけ野郎であらうか。どれだけの幸福な結末が不幸な結末なのだろうか。どれだけの正直者が嘘つきであり、勇者が臆病者であり、忠誠な人間が反逆者なのであろうか。どれだけの聖人ぶった人々が墮落しており、信用のおける地位にあるどれだけの人々が、わずかばかりの現ナマのために彼らの魂を悪党どもに売ったであらうか。これらすべてを足したり引いたりすると、残るのは子供たちだけ、それにまあアルバート・アインシュタインと、どこかの老ヴァイオリニストか彫刻家だけということになるだろう」。この波のように押し寄せる現実への絶望と現代社会の矛盾への抗議は圧巻であり、文学の持つパワーを実感させてくれる。